

堂御所御渡夜、調進御裝束并女房裝束、皆不憚赤色。然而近代不用之古今之作法異也。可依時儀事也。とあれば、ふるくは忌ざりし也。されば落窪物語に、人のいとよき所えさせたるを、この十九日、にわたらん人々のさうぞくし給へ、こゝもすりせさせん、とくわたりなんいそぎ給へとて、ぐれなゐの絹 茜 染 草のきぬ、あかねをめくさどもいだし給へれば云々、此物語つくりし頃も、家うつりに、いまだ赤色をいまざりしなり。

〔丙丁炯戒錄〕我公忠邦○水野佐大政之暇、常以觀書史爲樂。頃讀宋柴望丙丁龜鑑而有感焉。命臣世弘、倣其體、輯本朝事蹟爲一書以進。臣謹取舊史、斷自用明帝至後奈良帝、因事立論、一倣柴氏之書、以爲此編、抑五行之說盛興于漢、迨宋儒排之、而其傳衰矣。丙丁之爲厄、柴氏只謂自古而然而不著其說。至元人續錄叙載陰陽家之言云：丙丁屬火、遇午未而盛，故陽極必戰亢而有悔也。則亦五行說之類耳。達者不必言也。顧龜鑑之所以作、意欲令世主鑑往跡而倣今日修人事以奉天意焉。而公之所取蓋亦在于此也。臣才劣學薄、綴緝蕪陋、論斷失當、不能仰副盛意。然編中所載上下殆乎千年、有天變、有地妖、有人害、凡可備君相之畏戒者略具。讀者設身處地、省諸己、推諸當世之務、則於新德修政之際、或庶幾乎有微益云。

歲次戊戌天保九年夏五月

臣鹽谷世弘謹書